賦得古原草送別

白居易

草<白樂天>
離離たり　原上の草
一歳に　一たび枯榮す
野火　燒けども　盡きず
春風　吹いて　又生ず
遠芳　古道を侵し
晴翠　荒城に接す
又王孫の　去るを送れば
萋萋として　別情滿つ

くさ　<はくらくてん>
りりたり　げんじょうのくさ
いっさいに　ひとたびこえいす
やか　やけども　つきず
しゅんぷう　ふいて　またしょうず
えんぽう　こどうをおかし
せいすい　こうじょうにせっす
またおうそんの　さるをおくれば
せいせいとして　べつじょうみつ

字解

離　離　　草がつやつや生い繁っているさま　ならび連っているさま
一　歳　　１年
枯　榮　　枯れたり繁ったり
野　火　　野原で枯草を燃やす火　のび
遠　芳　　遠くにつづく草の香り
晴　翠　　晴れた草原の緑色
荒　城　　荒れ果てた城壁
王　孫　　王者の子孫　貴公子
萋　萋　　草や木のしげっているさま
別　情　　離別の情

意解

　つやつやと生い繁っている野原の草は、１年に１度枯れたり、繁ったりしている。

　野原で枯草を燃やしても、その根は尽きることがなく、春風の吹くころにはまた芽を出してくる。

　遠くにつづく草の香りは、古い道にまでただよい、晴れた日の草の緑色は、荒れはてた城壁に連なっている。

　またも王者の子孫が旅立つのを送るのであるが、草の生い茂る中に、離別の悲しみの情が胸一ぱいあふれてくるのである。

備考

　この詩は７８７年白樂天１６歳の作とされ「唐詩三百首」に所収されている。「長慶集」には「賦得古原草送別」となっており、草という詠物体に送別の意をからめた詩であり、本会では

「草」と簡略にした。詩の構造は平起こり五言律詩の形であって、下平声八庚（こう）韻の榮、生、城、情の字が使われている。第三句は二四不同になっていない。

作者略伝

白樂天　772－846

　中唐の大詩人。名は居易（きょい）、字は樂天、号は香山居士（こうざんこじ）。陝西（せんせい）省渭南（いなん）の人、太原（たいげん）の人（山西省）ともいう。家は代々官吏。早く

から詩を作り、16 歳「春草の詩」17 歳「王昭君」の作あり。貞元（ていげん）１６年（８００）進士。元?（げんしん）と親交あり。江西省九江の司馬に左遷されたこともあるが、ほぼ中央の

官にあり、刑部尚書（ぎょうぶしょうしょ）にて没す。年７５。「長恨歌」（ちょうごんか）「琵琶行」（びわこう）の大作あり。「白氏長慶集」（はくしちょうけいしゅう）「白氏文集」（はくしもんじゅう）など我が国にも伝わり、平安文学に感化影響を与えた。

離離原上草,
一歳一枯榮。
野火燒不盡,
春風吹又生。
遠芳侵古道,

晴翠接荒城。
又送王孫去,
萋萋滿別情。

******

古原の草を賦し得て 送別す

離離りりたり　　原上げんじゃうの草,
一歳に 一たび　　枯榮 こ えいす。
野火 や くぁ　　燒けども 盡きず,
春風 吹きて　　又また生ず。
遠芳　　古道を 侵をかし,
〓翠せいすゐ　　荒城に　接す。
又　王孫わうそんの　去るを 送れば,
萋萋せいせいとして　　別情 滿つ。